宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学　第14号（2006）53－63頁

宮崎県の生活綴方教師・木村寿（五）

――文集『ひかり』における童話指導――

菅　邦男

木村寿は宮崎県の生活綴方教師である。昭和七年から九年にかけて東臼杵郡土々呂尋常高等小学校（現延岡市）に勤務し、学級文集『ヒカリ』『ひかり』『光』を出していた。男子組五十余人を担当し、一年生から三年生までの持ち上がりである。その尋常二年生の文集『ひかり』に、児童詩や綴方に混じって、子どもの書いた童話が見える。計八篇である。雑誌『綴り方倶楽部』には、現存する文集『ひかり』（欠号あり）に見ることのできない作品が掲載されているので、実際にはもう少し多かったと思われる。いずれにしろ、児童詩や綴方に比べれば、僅かな数である。低学年の子どもに童話の創作は難しい面があったのだろうと思われる。

では木村寿は何故、またどのような考えのもとに、低学年における童話指導を行ったのだろうか。

1、文集『ひかり』の童話

文集『ひかり』に初めて童話が登場するのは、第十四号（昭和八年十月七日）においてである。二年生が書いた童話五篇が収録されている。「童話（試作）」と但し書きがあり、これが最初の指導であったことが伺える。

短い作品を例に挙げてみる。

くつわ虫　　尋二　谷　勇一

まだくらくなりません。くつわ虫があかるいものだから　はやくくらくなるといいといつて、あつちやこつち　もふたりして、なくとこをさがしてゐました。

あとかりなつて　がらがらといひ出しました。やかましほず、がちやがちやといひ出しました。こほろぎが　りろりろとなき出しました。くつわ虫がやめました。ありやへただとおもひました。又なき出しました。こほろぎはまだないてゐます。こほろぎとくつわ虫が、はなして、こゑがいいぐらをすうやといつてなきました。くつわ虫は長くないてやめます。こほろぎは　ちつとも　やめずに、りろ、ちゆたかとおもふと、もうりろりろとなきます。くつわ虫は　なきぐらにまけて、あつちさねにげて行きました。（九、一九）

くつわ虫とこおろぎの鳴き比べである。ストーリー性に加えて、相手を下手だと思ったくつわ虫が負け、途中でやめずに鳴き続けたこおろぎが勝つという教訓性を含んでいる。

これらの童話が書かれたのは九月十九日であるが、「学級日記」には前日に指導があったことが書かれている。

学級日記　　吉井己義　戸松愛明　花岡友美

九月十八日　月　くもり

今日ちやうれいに、まんしうのお話をきいた。けやうしつで、先生から、又話をならつた。よみかたとさんじゆつがすんで、童話をきかせてもらつて、童話のおはなしをきいた。ぼくは童話は出きるとおもひました。

「又話をならつた。」とあるから、何度か指導があったのである。『ひかり』第十三号（昭和八年七月）の「文集について」には、

「九月になつたらつぎのやうな新しいこともはいれていきます。

一、童話　おはなしです。つづりかたとはちよつとちがひます。

二、本のけんきゆう。本をしらべる時には、どんなことをしていつたらよいか、といふやうなしらべかたです。」

と、二学期から童話と本の研究を始めることが予告されている。予告通り九月に童話の指導をして、十月には文集に「試作」五篇を載せることができたわけである。

木村寿は十四号の「文集日記」（九月二十五日）の中で、「学校にいつて、二十四頁までのをすつた。一つが八十枚づつだから九百六十枚すつた。かたがすこしいたい。しかしきのふよりはよかつた。かへつて七じごろから十一時まで六十二頁のところまできつた。はじめてのどうわがあるのでおも白くかいた。」と、文集製作の苦労を述べながらも、童話という新しいジャンルが加わったことを喜んでいる。

翌月には第十五号が出ている。三人の子どもが童話を書いている。

コスモスとてふてふ　　吉井己義

あるにはにコスモスの花が　もも色　白色たくさんさいてゐました。
お日さまはにはいつぱいてつて、草も花も　ぴらぴらしてゐました。
コスモスの花は
「いい日だなあ」
とひとりごとをいつてゐました。草の上をとんでゐたてふてふが
「ああ　くたびれた」
といひながら、もも色のコスモスの花にとまりました。コスモスの花が　ひよかつと　ぐらつとまがりました。コスモスの花は、
「だれだ　ぼくの上にのるのは」
としかりつけるやうなこゑで　いひました。
「はいはい。てふてふですよ。あんまりくたびれたから、やすませて下さい。」
と、しずかにいひました。するとコスモスの花は
「いやいや、おまへは白色ではないか、ぼくの色にくらべると　ごみのやうだから　いやだ。」
といひました。
するとてふてふはおこつて「こんなもも色のところにおると、おれにもも色がつく」といつて　とんで白い花に行きました。
「ああ、てふてふがいつた。かるくなつた。」
といひました。そうすると又そこへてふてふがきて　やすみました。
「又きたなあ」とコスモスは、くびをふりました。しかりつけました。すると、こんどのてふてふは　だまつておりました。コスモスがしかつてもしらんふりして　とまつてゐました。コスモスは、く

びをぐるぐる　ふりました。
「こらこら　つんぼ」
といつてわらひました。するとてふてふは
「なんだつんぼだ、つんぼではないよ。」といひました。
「それでも　きこえんではないか」といひました。
コスモスの花は　ゆさぶりはじめました。そして「どけどけ」としかりつけました。あんまりゆさぶつたので、花びらが一つひらひらちりました。てふてふは　はつとおもつて　とんで行きました。

吉井己義は第十四号にも「ありとくわし」（蟻と菓子）という童話を書いているが、それに比べるとストーリー性もしっかりしてきている。花びらが一枚散ったのを見て、蝶が「はっ」と思って飛んでいくところなど、心情表現にも富んでいる。

前号では五人の子どもが書いていたのに対し、この号では書き手が三人に減っているのでも分かるように、尋常二年生には、童話は難しかったようである。

木村は子どもたちの童話の後ろに、次のように書いている。
「どうわを書かうと思つて、いろいろくふうしてゐる人は四五人しかゐません。どうわも、この前話たやうに、うそを書くのでなく、つづりかたと同じなのですから、よく物のすがたをしつてゐれば、書けるのです。吉井君はつづけてゐます。とにかく、吉井君のやうに、やりはじめたら、りつぱなものになるまで、こん気よくやるのです。」

五十余人の生徒のうち、童話を書いていたのは四、五人だったのである。

ところで、木村はこの中で「どうわも、この前話たやうに、うそを書くのでなく、つづりかたと同じなのですから、よく物のすがたをしつてゐれば、書けるのです。」と言っている。童話が「うそを書くのでなく、つづりかたと同じ」とは、どういうことだろうか。

2、木村寿の童話観

『綴り方倶楽部』昭和九年四月号には、「童話の作り方」として木村寿の文話「隆（たかし）の童話」が掲載されている。綴方は書けるのに童話になると今ひとつ理解出来なかった「隆」が、先生の話を聞いて童話を書けるようになるまでを物語風に書いたものである。

この中で、隆が今まで童話を書けなかったのは、童話と綴方を別なものとして捉えていたからだと述べられている。隆は先生の「動物の生活を童話にするお話」を聞いて、「綴方とまるつきり別なものだと考へちがひをしてゐた事もはつきりわかつたし、童話の材料は生活の中に綴方と同じ様にあることもはつきりわかつたので、おれには童話が書けるといふ自信がついた」のである（モデルである木村隆は、実際に「おや牛と子牛」という童話を書いている）。

木村寿は童話を「綴方とは別ではないが、色のちがつた匂ひの別な綴方」だと説明している。

木村は『にはとりとねこ』という「にはとりのおや子と、ねこのおや子がえさを探し合つたりにらみつこをしたりして居る」綴方を例にとり、「君たちはおも白い、よく書いてあると感心してゐるが、若しにはとりや猫にこの文が読めるとしたら、この子供はうそばつかり書いてゐると思ひはしないだらうか。」と子どもたちに問いかける。

従来の綴方は、動物の姿や生活を「ああだ、かうだと書いて来た」のだが、この他に「動物の心になつて書く綴方もあつてよいのだ」というのである。

動物の心になって書くためには、動物の立場に立って物を見なけ

ればならない。

「一羽の雀が電線にとまつて鳴いて居る。これを下の方から、じつと観察してゐるだけでなく、童話を書く心は、雀と一しよに電線にとまる心になるのだよ。それでないと雀の心になる事は出来ない。」

ある動物の立場に立って、動物の観察をする。動物の心を知るには、動物の視点からの観察が必要である。

木村寿は「観察（生活を調べる）といふことも一ぺんや二へんで心を調べる観察は出来ないのだ。動物の童話は動物の心を調べてはじめて出来る事です。」と言い、「君達が自分の事を色々観察するやうに、動物が動物の事を観察するやうな観察をするといいのです。」と述べている。

そして動物の心になって観察したことを「動物の言葉で動物同志（ママ）が話し合ふやうな言葉で書いたら、それが立派な童話になる」のだと言っている。

前に引用した童話「コスモスとてふてふ」（吉井己義）にしても、コスモスと蝶々それぞれの心が捉えられ、それぞれの立場からの対話がなされている。

むろん、対象は動植物だけではない。無機物もその対象となる。

がらす

尋二　花岡友美

今日はいつもよりお日さまが　ぴかぴかてつてゐました。みんなぬくいといつてゐました。がらすは　ぴかぴか　光つてゐました。がらすはぴかぴか光つて、みるものは　みんな　まぶしいでした。そのうちでも　かんごふさんのへやのがらすは、家が新しいから、きらきら光つてゐました。下のならびのがらすと、上のならびのがらすは　ちがひます。上のがらすは、子供が、人がゐるのが見えるから、よいと　いばりました。

したのがらすは、おれは、まばいこたねからよい、といばりました。そして、おれのとこは、あついから　子供がよろこぶといひました。上のがらすは、おれはいつもきれいだ、子供がざうきんをもつてきても　とどかないからよいといひました。

したのがらすは、そつでん、おれのとこには　子供がきて、はーとして字を書くけいこをするからよいといひました。

（『ひかり』第十五号　昭和八年十一月）

これは『ひかり』第十五号に載った童話だが、角虎夫は『綴り方倶楽部』昭和九年四月号の文話「かうして書く―題材の見つけ方―」の中で、これを引用して次のように解説している。

これは二年生の花岡君の書いたお話です。面白いでせう。

新しい看護婦さんの部屋のガラスの、上のならびのガラスと下のならびのガラスが、いつもよりお日様ぴかぴかてつてゐる日に自慢し合ふところをお話に書いたのです。

皆さんは上のならびのガラスと下のならびのガラスのちがふのはむろん知つてゐるでせう。上のガラスはきれいで向ふが見えるが下のガラスは皆さんがすみをつけたり、きたないざうきんでふいたりするので、あまりきれいでないし、向ふも見えないでせう。上のガラスはお日様でまばゆいが、下のガラスは日があたつてもまばゆいことはありませんね。又ガラスに息を吹つかけて字を書いたりすることもよくあるでせう。花岡君は看護婦さんの部屋のガラスがぴかぴか光つてゐるのを見て、あそうだ。上のガラスと下のガラスと自

慢のしつこをする童話を書かうと考へついたのでせう。こんなふうにして花岡君は題材を見つけ、童話「がらす」を書いたと思ひます。

生き物ではなくても、周囲のどんなものでも、例えばガラスでも、よく観察してその状況を捉えれば、りっぱに童話になるのだという。

木村寿風に言えば、上のガラス下のガラスそれぞれの心を捉え、互いの立場からの会話を成立させているのである。

木村寿の「調べる綴方」の中に、「心を調べる綴方」があった。「心を調べる綴方」は、子どもが、その時々の自分の心を調べるのである（「宮崎県の生活綴方教師・木村寿（四）～文集『光』における「調べる綴方」の展開～」宮崎大学教育文化学部紀要教育科学第一三号参照）。

木村寿の言う童話は、素材（登場人物）の心を調べるのである。動物の童話であれば、動物の心を調べる。

これは、調べる対象は違うが、同じ「心を調べる綴方」である。つまり木村寿の言う童話は、「調べる綴方」なのである。木村寿の言い方を借りれば、「調べる綴方とは別ではないが、色のちがつた匂ひの別な調べる綴方」である。

3、木村寿の童話指導と浜田広介の写実論

学級日記にも「けやうしつで、先生から、又話をならつた。よみかたとさんじゆつがすんで、童話をきかせてもらつて、童話のおはなしをきいた。」とあるように、木村寿はしばしば童話を読んで聞かせ、童話について話をしていた。どのような童話を読んだか具体的な作品名は分からないが、木村寿の文話（『綴り方倶楽部』昭和九年四月号）の中には、次のような箇所がある。

「隆の組では、もうこれ迄に先生から二三ぺん童話の話を聞いたり読んでもらつたり書く心の事も勉強したので、五六人の子供は作つたりするものも居ました。濱田廣介先生の童話を一緒に研究する時など、隆の心は童話を書きたいといふ心が一つぱいあるのです。」

（一、隆と童話）

木村寿は浜田広介の童話を手本として与えていたのである。むろん読んで聞かせた童話が浜田広介のものだけだったわけではない。文集にも「野口英世」の本を読んでもらったことが子どもの文に出て来る。ここでは浜田広介の童話を「一緒に研究する時」とあるから、童話の書き方に関する「研究」だったのである。『ひかり』十三号の「文集について」の中で、九月になったら童話と共に「本のけんきゆう」を始めるとあった通りである。

では、なぜ木村寿は浜田広介の童話を「研究」の対象に選んだのか。

浜田広介は「新しい童話について」（『綴方生活』第三巻第四号昭和六年三月）の中で、これまでの童話は「荒唐無稽に話を進めて、そこに何らの必然性がない、不合理なものが多い。」と批判し、「どこまでも作者の実感に出発し、写実的に筆をすすめるといふのが本体ではないかと思ひます。」「写実をぬけば童話の生命はなくなるだらうと思ひます。」と述べている。

写実を重視する浜田は、「必然性のない、不合理な童話」の例を幾つもあげている。羊飼いに飼われている「赤い羊、青い羊」、初春に庭さきに飛んで来た「大きなカマキリ」。浜田広介は「一体この世の中に、赤い羊や、青い羊がゐるものでありませうか。」「いかにどうでも、寒い冬がやつといつてまもなくの春さきに、そんな大きなカマキリがゐるはずはありません。」「漫然とそんなことを書いては困る」と批判している。

次に「自然界の事実とちがつてはゐないが、単なる当て推量から

ひどい失敗をしてゐる例」として、ある作家の「かくれんぼ」という作品を例に出している。

かくれんぼ
まつてもまつても　鬼は来ぬ
まどからお庭　のぞいたら
かしの木に来た　みそさゞい

浜田広介は、みそさざいは「多くは低温の地に住み、谷間とか家の背戸などにとんでゐるのを見かけること」はあるが、「普通の小鳥の如く空をとんでゐることは殆んどない」と言い、「『樫の木にとまるみそさゞい』はをかしくはありませんか」と指摘している。

自然界の事実として樫の木にとまることもあるかもしれないが、「樫の木にとまつたみそさゞいがこの謡の中でどれだけ生きてゐるか」「雀でも鳩でもいゝのではないか」というのである。語句の使用に、必然性が無いのである。

浜田は「これはつまり、よく調べもしないで、いゝ加減に当て推量で書いたり謡つたりする所から、こんなことになるのです。」と結論づけている。よく調べもせず、生半可な知識で書くから安定を欠いた必然性のないおかしな表現になってしまうと言うのである。

また浜田広介は筋の面白みを持つことは大事だが、「それにしても描写は必要であります。描写の根本は物の事情をよく見る観察であります。」（写実を学べ）とも言っている。

「よく調べる・描写の根本は観察」という浜田の言葉（考え方）は、綴方教育を始めた当初から「観察の綴方」をやってきた木村寿にとって、我が意を得た思いであったに違いない。

木村寿は『ひかり』第十四号で、子どもたちの童話について、次のように述べている。

「童話も、つづり方とおなじやうに、うそを書いてはだめです。つくりごとは　だめですよ。ありの童話を書く人は、ありのことをよくしらべなければなりません。ありごが、空をとんであるいてゐました、なんて書く人があつたら、だめですよ。しらべることは、ありのほんとのすがたをみるのです。」

これはまさに浜田広介の考え方である。「蟻が空を飛んで歩く」のが嘘だというのは、浜田の言葉で言えば「安定を欠いた必然性のない表現」ということである。単に「そんなことはあり得ない」というだけの意味であれば、ガラスが口をきく童話（土々呂小　花岡友美「がらす」）など、文集に載せる筈はない。コスモスと蝶が会話する話も成り立たないことになる。浜田は、「梅に鶯」という言葉はしっくりしているが、「樫の木にとまるみそさゞい」はおかしいと言う。俳句で「動く言葉動かぬ言葉」ということを言うが、「樫の木にとまるみそさゞい」は動いているというのである。「ありごが、空をとんであるいてゐました」も、動いているという意味で「嘘」なのである。

浜田広介は、更に「筋における必然性」や「擬人法の傍若無人な例」について述べ、最後に次のようにまとめている。

「赤い物は赤いと見、長い物は長いと見ること、その外面を見ることはやがて本質を見ることであらうと考へます。しかも作者の態度及び個性をとほしてそれが表現される。いひかへれば創造性を表はすものであると信じてをります。従つて五人の作者があれば、五人ともちがつた創造となつて表はれて来るべきであると考へます。」

外面をありのままに見ることは「やがて本質を見ることである」というのは、木村寿の「しらべることは、ありのほんとのすがたをみるのです。」という言葉と重なってくる。子ども一人一人が物の

「外面をありのままに」見、自分なりにその本質を捉えれば、例え同じ物を綴方の対象としていても、創造された作品は違ったものになってくるはずである。文集『ひかり』の作品が独自性に富んでいるのは、吉田瑞穂が「木村寿の『土々呂の詩』を読む」（『綴方行動』創刊号　昭和九年七月）の中で指摘している通りである。

木村寿が浜田広介の童話を子どもたちとの「研究」対象にしたのは、浜田の写実論がまさに木村の「観察の綴方」そのものだったからである。

木村寿は「低学年に於ける文集製作」（『綴方生活』第五巻第一号　昭和八年一月一日）の中で、「文集によつて、子供たちは、忘れてゐた自然の姿、なほざりにしてゐた自然の心を、かすかながらも感得する様になる。文集に盛られた自然素描が、はしなくも自然を又見返へす一つの機縁となつて、自然への親しみは、いよいよ深く広く、正しくなつていく。」と、文集の基盤が「自然観察の綴方」であることを示唆している。

そして次のように付け加えている。

「文集は、又、創作心を楽しませる一つの光りあるものになつてゐる。」

文集に盛られている作品は「創作」として捉えられているのである。木村寿の考える童話が「調べる綴方とは別ではないが、色のちがつた匂ひの別な調べる綴方」であったのは、木村が童話も綴方も創作と捉えていたからである。

ありごのはこび

木村　隆

私が　いを（うを）のほねや、ときびのかすを　にはになげておつたら、いつ時して一ぴきのありごがやつて来ました。そしてそのありごは、そのあたりをぐるぐるしてゐましたが、あなの中に　はいつていきました。私は　あなのところに行つてじつと見てゐました。こんどは、一ぴきもないやうに、どろつと出てきました。そして　どんげするかと　おもつて　見てゐたら　みんなのありが、一二の三でえいやえいやと　はこびはじめました。みんな一かたまりづつひつぱりました。

そしてあなの近くになりました。私は　あなの近くになつたからどんげするかと　おもつて見てゐたら、ときびのからが大きくて、中中はいつていきません。ありはこまつてしまいました。あなの中から、ひつぱるやつ　上からおすやつ　一しやうけんめいやつて、とうきびのからは、ひよろつとはいつて行きました。

こんどはべつなとが、いをのほねを入れはじめました。こんどはいをのほねは長いから　はしをかけたやうになつて　はいつていきません。どんなにするかと　見てゐました。あなの中から出てきて、どんどんしよ　といひました。ほねがちつといいました。それで私は、もうすこしだ　どんどんはこべといつて　私は手をあげました。そしたら　ありは　こんどは　出てしまつて上から　おしました。そして下から　ひつぱるやつもあります。それだから　はいつてしまひました。はいつてしまつたころには（やすんで）　みんな出てきません。もうみんな、よくてるのでせう。もう　いいごろ（よいころ）になると出てきました。

そして又えさをはこび出しました。こんどは、へんぼの　くされをみつけてはこびました。石の上を　あがつてさがすやつもおります。

石をええあがらんとは、石のないとこさ(ところの方)ねいきます。
とんぼは大きいから、しりつぽからきつて、たてさね　きつていれました。そして　ぢゆんに、下をはこぶものは下をはこんで、上をはこぶものは上をはこんでいります。こんどは　はねをきりました。はねがぴらぴら　うごいてはいつていきます。左のはねも　はこびました。あたまだけ　はこびました。それは　みんなが　力をあはせてはこびました。あたまもはいつていきます。(九、一二)

魚の骨を巣に入れようとして穴にひっかかった時、蟻が「あなの中から出てきて、どんどんしよ　といひました。」とある。「どんどんしよ」は「どんどんせよ」あるいは「どんどんしよう」の意味である。蟻が口をきいているのである。これは童話ではなく、綴方である。しかし木村寿は「嘘を書いてはいけません」とは言わない。「ありごがものをはこぶ時のいろいろのやうすが、よくしらべられて書いてあります。」と褒めている。

「目と、心が、よくこのことにうごいてゐるのです。(略)木村君の心が、うごいて出てゐます。ありごと一しよになつてゐます。ほんとに、心と目を、じぶんの今してゐることにむけていくと、これほどよい文が出来るのかとおもつた。」

目と心がよく動いて「蟻といっしょになっている」のは、童話を書く心である。「雀と一しよに電線にとまる心」である。この綴方が載っている『ひかり』第十四号は、童話を「試作」している号である。綴方と「童話(試作)」は別分けにして掲載されているが、木村は綴方と童話を本質的に別物と考えていたわけではないのである。

4、お話としての童話

創作は、平たく言えば「お話作り」である。

一年生の文集『ヒカリ』には、第四号(昭和七年十月)から「お話」が載っている。表紙をめくると「(オハナシ一)木ノハト木ノハ」が載っている。作者名は無い。

木ノハト木ノハ

アサ　ノ　カゼ　ガ　ナンダカ　サムク　ナツテ　キマシタ。ユフガタ　ノ　カゼ　モ　ミ　ニ　シミ　テキマシタ。
ガクカウ　ノ　サクラ　ノ　木ノハ　ガ、一マイ、一マイ、マタ一マイ　ト　チリ　ハジメマシタ。
キノフ　ノ　バン　ニ　フイタ　カゼ　ニ、ケサ　ハ　サクラ　ノ　ハ　ガ　スツカリ　チツテ、タツタ　二マイダケ　ノコツテ　ヰマシタ。一マイ　ノ　木ノハ　ガ　イヒマシタ。
「サミシク　ナツタネ。キミ　ト　フタリ　ダケ　ニ　ナツタヨ。」
「ホントニ。ユフベ　マデ　ハ　アンナ　ニ　ニギヤカ　ダツタ　ノ　ニ、ケサ　ハ　フタリ　ニ　ナルナンテ、ホント　ニ　サミシイネ。」
「ボクタチ　モ、モウ　スグ　チルダラウ　ネ。」
「ヒトリ　ニ　ナル　ト　サミシイネ。チル　ナラ　フタリ　一シヨ　ニ　チラシ　テ　モラウ　ネ　一シヨニ。」
キノフ　マデ　ハ　コノ　木ノハ　タイヘン　ナカガ　ワルカツタノデス。アクルアサ　オニハ　ノ　スナノ　上　ニ、ニマイノ　木ノハ　ガ　ナカヨク　チツテヰル　ノ　ヲ　ワタシ　ハ　ミマシタ。

学校の桜の葉を素材にしたお話である。これは童話としてのお話

である。

目次をはさんで「（オハナシ二）セミトアリ」が載っている。

（オハナシ二）セミトアリ

「アア、サムイ。」

一本ノ大キナケヤキノ木ニトマツテヰタセミガ、オモハズ、ツブヤキマシタ。セミハチカゴロナンダカカラダガダルクナツテキマシタ。大キナコヱヲダソウト オモツテモ、スコシモデマセン。ムカフノ木ニトンデイコウトタビタビオモヒマシタガハネガイタクテトブチカラガアリマセン。セミハキノフノオヒルノコトヲオモヒダシマシタ。ソレハトモダチノセミガドウシタノカヒトリデヂメンヘオチタノデス。トコロガソコヘタクサンノアリガアツマツテキテ、トモダチノカラダヲヒイテイクノデス。セミハ木ノエダカラミテヰテ、タイヘンクヤシクオモツテ、アリヲウラミマシタ。ボクノカラダニアタツテミヨ、ハネトバシテヤルゾ、ト、オモツテヰマシタ。ト、キユウニカラダガダルクナツテ、セミハキノエダカラ、ヂメンヘオチマシタ。ソコヘアリガタクサンアツマツテキマシタ。ソシテキノフトオナジヤウニヒイテユキマシタ。

これは完全に童話と言って良い。お話イコール童話なのである。

しかし文集末にも「十月ノオハナシ」があり、ここでは綴方を「お話」と呼んでいる。

十月ノオハナシ

●十月ニナルトオハナシヲカクモトガタクサンアリマス。

カキ　木ノエダニマツカニウレテヰマス。カラスガトキドキカキヲツツキニキマスネ。

ミカン　スコシキイロクナリマス。コユイミドリノハノカゲカラ、キイロイミカンノミエルノハイイモノデスネ。

ヨルノソラ　十月ノソラハヨルハトクニキレイデス。ネルマヘニチヨツトデモミテクダサイ。ホシモトビマスヨ。

ムシトリ　ニハニイクト、クサハラニイクト、ムシガトブデシヨウ。バツタガ。コホロギガ。

イネ　田ノイネモキイロクナリマシタ。スズメガトンデヰマス。イナゴガトンデヰマス。カガシモタチマシタネ。

『ひかり』第七号（昭和八年一月一日）の「オハナシ」は、次のようなものである。

オハナシ（七）

フユガキタノデ、サムクナリマシタ。ケフハサムイキタグニノ子供ノオハナシヲシマス。

土々呂カラキシヤニノツテ、三日バカリキタノハウニススムト、トウキヨウノサキニイキマス。日本デハキ

タノクニ　ト　イヒマス。
マイ日、ユキ　ガ　フルノデス。イマカラハ　オ天キ　ノ　トキモ
　アルガ、ユキノ　フルトキ　ノ　ハウ　ガ　オホイ　ノ　デス。
ミンナ　ノ　セイ　ノ　タカサヨリモ　ツムノデス。ミチハ　ワカ
リマセン。田ヤハタケモ　ワカラ　ナイ　ノデス。ドコ　ニ　イヘ
　ガ　アルカ、トイフコトモ　ワカラナイトキガ　アルノデス。
子供タチ　ハ、ソノユキノ　中ヲ　マイ日　ガクカウ　ニ　イツテ
　キルノデス。サムイ　デスヨ。チメタイ　デスヨ。ソレデモ　イ
ヤ　ト　イフ子供　ハ　キマセン　ネ。ゲンキ　ガ　イイ　デスヨ。
子供タチ　ハ　ユキノ上　ヲ　アルク　ゾウリ　ヤ、ユキノ　フル
トキニキル　キモノ　ヲ　キテ、ガクカウ　ニ　イク　ノデス。
キタノクニ　ノ　子供タチ　ハ、ソンナトコロ　デ　ベンキヨウ
シテキルノデスヨ。

これは北国の子どもについての、いわゆる先生の「お話」である。

木村寿は一年生の文集『ヒカリ』の時から、いわゆるお話も、童話も、綴方も、すべて「お話」と呼んでいたのである。綴方を書くことも、童話を書くことも、「お話」を書くことであった。木村寿にとって綴方も童話も「観察の綴方」であり、本質的には同じものだったからである。

しかし童話指導には、「対象の心になってみる」という視点の転換があった。

『綴り方倶楽部』昭和九年四月号の「みなさんの作つた童話」には、土々呂小学校の「とんびと子供」（高橋敏郎）、「ぶた」（黒木重行）の二篇が収録されている。共に二年生の作品である。

とんびと子供

高橋敏郎（尋二）
宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

いわしがたくさんとれて、いわしがはまにほしてありました。とんびが北の方からとんできました。さかながぴかんぴかん光つてゐたからほしいと思ひました。とんびはさかなの上にきて、ぴいひよろ、ぴいひよろ、となきました。

子供がとんびを見ました。とんびはひもじくてたまりませんから、又、ぴいひよろ、と鳴きました。そしてわをかいて見せました。子供が「とんびが字をかきよるが」といつてよろこびました。とんびは、子供があつちにいくといいじやがと思ひました。とんびはわをかいて鳴きながら、ぴいひよろ、ぴいひよろ、と、首をうごかして、鳴きました。とんびは、なんぼでもわをかいて鳴きました。子供はとんびが、ひもじいのだらうと思ひました。それでも子供は、さかなのばんをせんならんとぢやから、あつちに行くことはできません。とんびがひもじいだらうと思つて、ねむつたふりをしました。そしたらとんびはおりてきて、一番いわしのわるいのを一ぴき取つて上りました。子供が上を見たら、とんびは、うれしさうに、ぴいひよろ、と鳴いて、北の方へまつていきました。（木村壽先生指導）

まさに、とんびの心になり、子供の心になり、両者を対話させている童話である。互いを思いやる、心温まるお話になっている。「動物の心になり、動物の立場に立って見る」童話指導の成果である。

木村寿の童話指導は数多くの「童話」を生んだわけではないが、

短期間のうちに、「とんび」のような質の高い作品も生み出したのである。それは一年生の時からの「観察の綴方」の基盤があったからである。

付記　本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第八部をなすものである。

（二〇〇五年九月三〇日受理）